

現代アイスランド語の非人称構文の機能的分類

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 入江, 浩司 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/47503

現代アイスランド語の非人称構文の機能的分類

入江浩司

1. はじめに*

本稿の目的は、現代アイスランド語¹の非人称構文の主要なものについて、Malchukov & Ogawa (2011) (以下、M&O と略す) の提案する機能的分類に基づき、それぞれの機能がどのようにコード化されるかという対応関係を整理することである。その上で、M&O で提示されている意味地図を現代アイスランドのデータに基づいて検証してみる。

M&O は非人称構文を「指示的な主語項を欠く構文」と定義し (M&O: 20)、Keenan (1976) が提案した主語の概念を援用しつつ、典型的な主語をもつ構文からの逸脱を示すのが非人称構文であると捉え、機能的特性 (話題性、定性、動作主性など) とコード化の特性 (格標示、一致、語順など) の対応関係に焦点を当て、非人称のそれぞれの機能的特性がどのようにコード化されるかという通言語的な傾向に基づく意味地図を提案している。M&O は、Keenan (1976) が提案した通言語的に典型的な主語がもつとされる特性のうち、次の5つを非人称構文の類型を考える上で重要なものとして設定している。なお、d と e の特性は他動詞主語の場合に関係し、自動詞主語には必ずしも関与しないとされている。

- (1) a. 指示的な項である (a referential argument)
- b. 定の名詞句である (a definite NP)
- c. 話題性をもつ (topical)
- d. 有生である (animate)
- e. 動作主性をもつ (agentive)

(Malchukov & Ogawa 2011: 23)

M&O ではこの特性に沿った分類で非人称構文の概観が行われており、本稿もこれに倣ってアイスランド語の非人称構文を検討していく。なお、受動文は非人称の現象を考える上で重要なものであり、アイスランド語でもそれは変わらないが、M&O では受動構造は典型的な主語からの逸脱がある際にとられる方略としてあまりに一般的であるため、個々のどの主語特性同士が近い関係にあるかを確定するという目的のためにはあまり示唆的でないという理由から考察の中心から外されており、本稿でも受動文²は基本的に扱わない。

ここで本稿の以下の構成を述べておく。第2節では M&O の非人称構文の機能的分類に基づき、それぞれのタイプがアイスランド語でどのようにコード化されるかを具体的に検

討する。続く第3節で、非人称構文の機能的特徴とアイスランド語のコード化方略の対応関係を整理する。第4節では、M&Oの提案する意味地図上にアイスランド語のコード化方略の分布を描いて検証してみる。最後に第5節でまとめを行う。

2. Malchukov & Ogawa (2011) の分類とアイスランド語のデータ

この節では、M&Oの非人称構文の機能的分類に従い、指示的でない主語をもつ非人称構文(2.1)、不定の主語をもつ非人称構文(2.2)、話題性のない主語をもつ非人称構文(2.3)、無生物主語をもつ非人称構文(2.4)、意思性のない主語をもつ非人称構文(2.5)の順にアイスランド語の具体例を検討する。最後に、動作主の現れない非人称受動文について簡単に触れる(2.6)。

2.1 指示的でない主語をもつ非人称構文

M&Oでは、非人称表現の中でも天候表現はそもそも項構造をもたないという点で特殊であるとし、主語のない天候表現(ロシア語など)と代役主語(dummy subject)による天候表現(英語)が最初に挙げられている。

(2) Svetaet. (ロシア語)

夜が明ける.PRIS.3SG

「夜が明ける。」

(M&O: 25)

(3) It dawns. (英語)

(M&O: 25)

次に、代役(助)動詞(dummy auxiliary verb)による構文(名詞主体の構文)として、ロシア語、日本語の例が挙げられている。

(4) Dožd' idët. (ロシア語)

雨 行く.PRIS.3SG

「雨が降る。」

(M&O: 26)

また、同族の主語と動詞を用いる構文をもつ言語もあり、エヴェン語の例が挙げられている(M&O: 26)。同族の主語と動詞を用いる構文は、動詞主体の構文と名詞主体の構文の中間的なものと捉えることができ、さらに、代役主語をもつ構文と語彙的主語をもつ構文の中間的なものとして「世界」や「天気」、「空」を表す名詞を主語とする構文があるとし、アラビア語の例が挙げられている(M&O: 27)。

アイスランド語の天候表現では、文頭のみ現れる中性単数代名詞 það と、文頭位置以外でも現れる指示的でない男性単数代名詞 hann を使った構文がある。ただし、það を用いる構文の方がはるかに一般的である(天候表現については入江 2015 を参照)。

(5) a. Það rignir í dag.

それ.N.SG.NOM 雨が降る.PRS.3SG 今日

「今日は雨が降る。」

b. Í dag rignir.

今日 雨が降る.PRS.3SG

「今日は雨が降る。」

(6) a. Hann rignir í dag.

彼.M.SG.NOM 雨が降る.PRS.3SG 今日

「今日は雨が降る。」

b. Í dag rignir hann.

今日 雨が降る.PRS.3SG 彼.M.SG.NOM

「今日は雨が降る。」

例 (5) の代名詞 *það* と例 (6) の *hann* は、どちらも何も指示していないという点で共通している。しかし、*það* は文頭位置が他の要素で占められれば生じず (5b)、それに対して *hann* は文を構成する要素として必須である (6b) という違いがある。したがって、アイスランド語の天候表現には、ロシア語の例 (2) に近いタイプと、英語の例 (3) と並行的なタイプが共存しているといえる。

2.2 不定の主語をもつ非人称構文

M&O では、不定の主語をもつ構文によく見られるのは、ロシア語のように代名詞ゼロとなることと、ドイツ語の *man* のような不定代名詞を用いることとされている。

(7) *Govor'at* (on uexal). (ロシア語)

言う.PRS.3PL 彼 去る.PST.3SG

「彼は去ったという話だ。」

(M&O: 28)

(8) *Man sagt* (er ist gegangen). (ドイツ語)

人 言う.PRS.3SG 彼 be.PRS.3SG 行く.PSTPT

「彼は去ったという話だ。」

(M&O: 28)

アイスランド語では不定代名詞 (的要素) として、ドイツ語の *man* に相当する *maður* (本来の「男、人」を表す用法もある)、英語の *you* に相当する二人称単数代名詞 *þú*、英語の *they* に相当する三人称代名詞の複数男性形 *þeir* を主語に立てる構文がある。

(9) Fyrst beygir maður til hægri.
 最初 曲がる.PRS.3SG 人 へ 右
 「まず右へ曲がる。」 (Sigurðsson & Egerland 2009: 159)

(10) Þeir segja að það rigni á morgun.
 彼ら.M.PL.NOM 言う.PRS.3PL と それ 雨が降る.SBJV.3SG 明日
 「明日は雨が降るという話だ。」 (Sigurðsson & Egerland 2009: 159)

(11) Í þessari fjölskyldu drekkur þú bara ekki áfengi.
 中で この 家族.SG.DAT 飲む.PRS.2SG あなた.SG.NOM 単に ~ない アルコール
 「この家ではとにかく酒は飲まないんだ。」 (Sigurðsson & Egerland 2009: 159)

この他にも *sumir*「何人かの(人)」(形容詞の男性複数形)、*menn*「人々」(*maður*の複数形)、*fólk*「人々」(名詞)を不定の主語として立てることがある (Einarsson 1945: 168)。

なお、アイスランド語では人称代名詞に指示性がある場合、指示対象の性によって複数形の使い分けがなされる。したがって、例(10)冒頭の代名詞に指示性がある場合、複数の男性が言っているという解釈になり、複数の男女が言っているという場合は *þau* (中性複数形)に、複数の女性の場合は *þær* (女性複数形)に替えなければならない。不定の人を表すには男性複数形のみが用いられ、女性複数形と中性複数形は用いられない。

表1 アイスランド語の複数代名詞 (人を表す場合)

指示性のない場合	指示性のある場合
þeir (男性複数形)	þeir (男性複数形) : 男性のみ
	þær (女性複数形) : 女性のみ
	þau (中性複数形) : 男性と女性を含む

(表では主格形のみを挙げる)

M&Oは通常の3人称代名詞とは異なる3人称複数代名詞を不定主語の構文に用いる言語があることに触れており (M&O: 28)、アイスランド語で指示性のない複数代名詞として3人称男性形のみが使用されるという現象も、同種のもので解釈できよう。

想定される動作主が不定で、法助動詞または現在分詞を使い、いかなる主語も現れない構文もある。現在分詞を用いた構文でも法性の読みが生じる点が特徴的である。

(12) Í þessari fjölskyldu má bara ekki drekka áfengi.
 中で この 家族.SG.DAT してよい.PRS.3SG 単に ~ない 飲む.INF アルコール
 「この家ではとにかく酒は飲んじゃいけないんだ。」
 (Sigurðsson & Egerland 2009: 160)

- (13) Það er ekki flytjandi þangað.
 それ be.PRS.3SG ~ない 引越す.PRSPT あそこへ
 「あそこへは越せない。」 (Sigurðsson & Egerland 2009: 160)

2.3 話題性のない主語をもつ非人称構文

M&O で次に取り上げられているのは、主語が新しい情報として導入されるために話題性をもたない場合で、文全体が焦点となる提示文が挙げられている。SV を基本語順とする言語の提示文でよくある方略は、語順の倒置であるとされている (M&O: 29)。言語によっては提示文で語順の倒置に伴い、主語のコード化の特徴が失われることがあるとし、動詞の一致を失うフランス語の例が挙げられている (M&O: 30)。

アイスランド語の提示文は 3 人称中性単数代名詞 það で導入され、文の第二要素となる定動詞はそれに後置される主語 (定の接尾辞をもたない主格名詞) と人称・数の一致をする。基本語順の SV から VS への倒置はあるが、主格主語と動詞の一致があるという点で典型的な非人称構文ではない。なお、文頭の位置に副詞相当句などが置かれる場合には代名詞 það は現れない。

- (14) a. Það komu tveir menn.
 それ.N.SG 来る.PST.3PL 二 男.PL.NOM
 「二人の男がやってきた。」

- b. Þá komu tveir menn.
 そのとき 来る.PST.3PL 二 男.PL.NOM
 「そのとき、二人の男がやってきた。」

例 (14) のような一般の提示文では動詞が後続の主語と一致しないことはまずないが、ドイツ語などでも見られるように、アイスランド語でも民話の冒頭で複数の登場人物が導入されるとき、動詞が 3 人称単数形で現れることがよくある。

- (15) Einu sinni var karl og kerling í koti
 一.DAT 時.SG.DAT be.PST.3SG 男.SG.NOM と 老女.SG.NOM に 小屋.SG.DAT
 sínu. Þau áttu einn son, en
 自身の.SG.DAT 彼ら.N.PL.NOM もつ.PST.3PL 一.ACC 息子.SG.ACC しかし
 þótti ekkert vænt um hann.
 思われる.PST.3SG 全く~ない 好ましいについて 彼.SG.ACC
 「昔、爺と婆が自分たちのあばら家に住んでいた。彼らには息子が一人あったが、(彼らは) その息子がまったく好きではなかった。」 (Einarsson 1945: 292, Búkolla)

例 (15) では、後置されている主格の主語は等位接続詞 *og* で連結された二人の人物であるが、存在を表す動詞が単数形になっている。続く文の主語は先述の複数の男女を指示する中性複数代名詞となり、動詞 *áttu* も 3 人称複数形である。なお、動詞 *þótti* は非人称動詞であるため 3 人称単数形である（動詞の直前に主語を補うなら、3 人称代名詞複数与格の *þeim* という形になるであろう）。冒頭の文の動詞は複数形 *voru* でもよく、実際にそのように語られるバージョンもある。例 (15) の冒頭の文は、語順の倒置があり、かつ、動詞の一致が消失しているという点で非人称的である。

2.4 無生物主語をもつ非人称構文

M&O では、有生ないし人間の項のみが動詞の一致ないし相互照応を引き起こす言語の例が挙げられている（トラパネコ語の例、M&O: 32）。また、サモア語のように、無生物の項のみ能格ないし斜格の間の選択が可能となる例が挙げられている。また、ロシア語の自然の力を表す項が主格で現れることも具格で現れることもできるという例も、おそらくこれに類する例として挙げられている（M&O: 33）。

アイスランド語では、主語の有生性の度合いによって主語の格標示や動詞との一致に影響が現れることは、おそらくないと思われる³。ただし、2.5 で触れる〈人の斜格+事物の主格〉の構文で、主格名詞句と動詞の一致が失われる現象は、むしろこちらの特徴の現れと考えるべきであろう。

2.5 意思性のない主語をもつ非人称構文

M&O では次に、主語が意思性をもって動作を行うかどうかで格標示や動詞の一致マーカーが異なる言語の例が示され、「子どもが壺を壊した」という文で、意図的に壊した場合は「子ども」が能格で、意図的ではない場合には接格で標示されるレズギ語の例などが挙げられている（M&O: 34）。

アイスランド語では、同じ述語動詞で動作主の意思性の違いによって主語の格標示が変わるということはなく、一般に主格主語をとる動詞が圧倒的に多いのではあるが、斜格主語をとる動詞または述語も非常に多く、斜格主語の意思性・動作主性は概して低い（主語の格は動詞ごとに決まっている）。以下にその代表的なタイプのものを Sigurðsson (2004) からの引用で示す。

- (16) Hana þyrstir. (対格単項動詞)
 彼女.SG.ACC 喉が渴く.PRS.3SG
 「彼女は喉が渴いている。」 (Sigurðsson 2004: 139)
- (17) Hana vantaði peninga. (対格・対格)
 彼女.SG.ACC 欠ける.PST.3SG お金.PL.ACC

「彼女はお金がなかった。」 (Sigurðsson 2004: 139)

(18) Henni líkuðu hestarnir. (与格・主格)

彼女.SG.DAT 好む.PST.3PL 馬.PL.NOM.DEF

「彼女はその馬たちが好きだった。」 (Sigurðsson 2004: 139)

(19) Henni varð þetta á. (与格・不変化詞動詞)

彼女.SG.DAT 成る.PST.3SG これ.N.SG.NOM 上に

「彼女はこれをしくじった。」 (Sigurðsson 2004: 140)

(20) Henni var óglatt. (与格・形容詞述語)

彼女.SG.DAT be.PST.3SG 吐き気がする.N.SG.NOM

「彼女は吐き気がした。」 (Sigurðsson 2004: 140)

例 (16), (17), (20) は文中に主格の名詞句がなく、純粋な非人称構文といえる。例 (18), (19) では動詞は後続の主格名詞句 (定の場合も不定の場合もある) と一致しているが、このような動詞では、人を表す斜格名詞句の方が事物の主格名詞句よりも前に現れるのが普通である。Sigurðsson (2004: 141-144) はこうした構文の文頭の斜格名詞句が主語の特性をもつことを示すテストのうち、再帰代名詞による再帰化や等位接続での省略など、主要なもの 7 つを挙げている。なお、例 (18) のような動詞の後に現れる主格の名詞句は、動詞と数でのみ一致し、人称では一致しない (3 人称の場合のみ一致) ということを Sigurðsson (2004: 148-150) は指摘している。数の一致に関しても、こうした構文が典型的な非人称構文に近づいている証拠として、例 (18) líka 「好む」のような動詞では、後続の主格名詞句が複数形であっても数の一致をせず、3 人称単数形で表れることがあるという現象がある (例 (21))。特に finnast 「思われる」, þykja 「思われる」といった動詞では、文中の主格名詞句が複数でも動詞が 3 人称単数形で現れることが多い (cf. Kress 1982: 186)。例 (22) では、動詞は単数形でも複数形でも可能である (話者により容認可能性が異なり、伝統的には複数形が正しいとされる)。

(21) Honum líkaði ekki samningarnir.

彼.SG.DAT 好む.PST.3SG ~ない 取り決め.PL.NOM.DEF

「彼にはそれらの取り決めが気に入らなかった。」

(アイスランドの日刊紙 Morgunblaðið ウェブ版 2004 年 2 月 5 日付記事を簡略化)

(22) Mér fannst / fundust þeir leiðinlegir.

彼.SG.DAT 思われる.PST.3SG/3PL 彼ら.M.PL.NOM つまらない.M.PL.NOM

「私は彼らがつまらないと思った。」

主格名詞句の現れる位置という点では、上記のような斜格主語構文は、主格主語をもつ典型的な他動詞文では主格名詞句が文頭に現れて斜格名詞句が動詞の後に現れることが多

いことと対比するなら、M&O が非人称構文の特徴の一つとする語順の倒置の現象と関連があると見ることができよう。

なお、アイスランド語には無生物の斜格主語をとる動詞もあり、斜格主語を有生名詞句のみの特徴とみなすことはできない。ただし、経験者の意味役割は有生名詞句に限られる。

(23) Bátinn rak á land. (対格単項動詞)
 ボート.SG.ACC.DEF 押し流す.PST.3SG 上に 陸.SG.ACC
 「そのボートは座礁した。」 (Thráinsson 2007: 207)

(24) Þokunni léttir. (与格単項動詞)
 霧.SG.DAT.DEF 軽くなる.PRS.3SG
 「霧が晴れてくる。」 (Einarsson 1945: 169)

(25) Vindsins gætir ekki lengur. (属格単項動詞)
 風.SG.GEN.DEF 感じられる.PRS.3SG ~ない より長く
 「風はもう感じられない。」 (Thráinsson 2007: 206)

例 (23) の reka 「駆り立てる、押し流す」という動詞では、主格の主語を加えて他動詞構造にすることも可能である。この場合、動詞は主格主語と一致する。

(26) Straumurinn rak bátinn á land.
 流れ.SG.NOM.DEF 押し流す.PST.3SG ボート.SG.ACC.DEF 上に 陸.SG.ACC
 「潮の流れがそのボートを座礁させた。」 (Thráinsson 2007: 207)

M&O (44-50) は、例 (23) のようなタイプを「他動的非人称 ('transimpersonal')」構文と呼び、歴史的に例 (26) のような構造から不定の主語が省略されて成立したものではないかと考え、非人称構文の機能的特徴としての主語の [-指示性] から [-意思性] へのつながりを示唆するものとしている。

2.6 受動文についての注記

第 1 節でも述べたように、M&O では受動文は典型的な主語からの逸脱がある際にとられる方略としてあまりに広く用いられるため、考察の中心から外されている。ただし、不定あるいは総称的な動作主が想定される構造は、動作主のない受動構文によって表されることが多く、このタイプの受動文は適用範囲が狭いゆえに、非人称の特定領域との関係を考える上で有用であるとしている。アイスランド語では次のような非人称受動文が該当する。

(27) Það var dansað alla nóttina (*af fólkinu).
 それ be.PST.3SG 踊る.PSTPT すべての 夜.SG.ACC.DEF によって 人々.SG.DAT.DEF
 「一晩中 (*人々によって) 踊られた。」 (Thráinsson 2007: 270)

オランダ語では (27) に相当する受動文で動作主「～によって」を明示することが可能で、提示文に近づいているとされている (M&O: 37)。

3. 非人称構文の機能的特徴とコード化方略の対応関係のまとめ

第2節では、典型的な主語からの逸脱の性質に着目した非人称構造の機能的分類に対応させて、アイスランド語の具体的な非人称構文を検討した。ここでその対応関係を表にまとめておく。なお、[-ref] 等のラベルは、次節で検討する意味地図上に主語の特徴を示すために M&O で使用されているもので、便宜的にこの表にも含めている。

表2 非人称構文の機能的特徴とコード化方略

主語の特徴	一般的な帰結	アイスランド語の方略
(1) 指示的項ではない [-ref]	・主語の省略／代役主語	・主語の省略（文頭以外の位置では現れない虚辞代名詞） ・代役主語（男性単数形）
(2) 主語が不定 [-def]	・不定代名詞 ・非人称専用の形態 ・主語の省略	・不定代名詞 ・指示性のない男性3人称複数代名詞 ・主語の省略（法助動詞、現在分詞とともに） ・動作主のない受動文
(3) 主語が話題性をもたない [-top], [new]	・語順倒置 ・一致の消失	・語順倒置（不定主語の後置） ・一致の消失（民話の冒頭）
(4) 主語が無生物 [-an]	・格標示の分化 ・一致の消失	・一致の消失（人の斜格・事物の主格） ・語順倒置
(5) 主語が動作主性をもたない [-vol]	・格標示の分化 ・（動詞側の）指標の分化	・格標示の分化（主語の格は動詞ごとに決まる） ・語順倒置（斜格・主格）

（左2列は Malchukov & Ogawa 2011: 38, Table 1 に基づく）

4. 意味地図による考察

M&O の提示する非人称領域の意味地図（図1）を下敷きにして、第3節で整理した非人称構文の機能的特徴とそれに対応するアイスランド語のコード化の方略をマッピングしてみる（図2）。M&O の意味地図では、典型的な主語から逸脱する機能的特徴を立て、諸

言語に見られる非人称のコード化方略が複数の機能的特徴にわたることに注目し、同じコード化を受ける特徴が隣接するように並べ、コード化の分布が円で囲んで示されている。[-ref] から [-vol] へ伸びる矢印は、「他動的非人称」構文の成立過程から想定される通時的な方向性をもつリンクである (2.5 末尾を参照)。

- Differential case marking: _____
- Agreement loss:
- word order inversion:
- Impersonal passivization: - - - - -
- Subject omission:

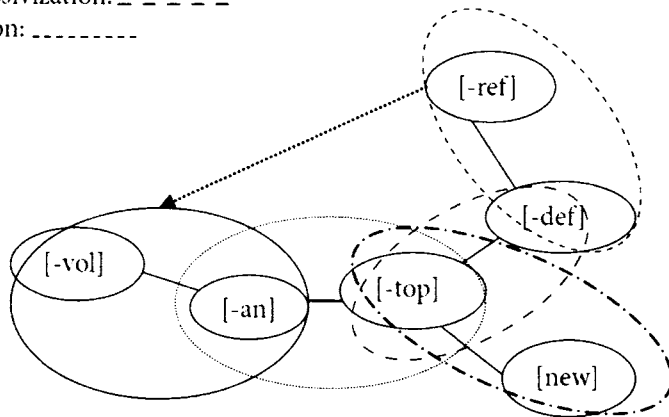


図1 Malchukov & Ogawa (2011: 42) による非人称領域の意味地図

- 格標示の分化: _____
- 一致の消失:
- 語順倒置:
- 非人称受動: - - - - -
- 主語の省略:

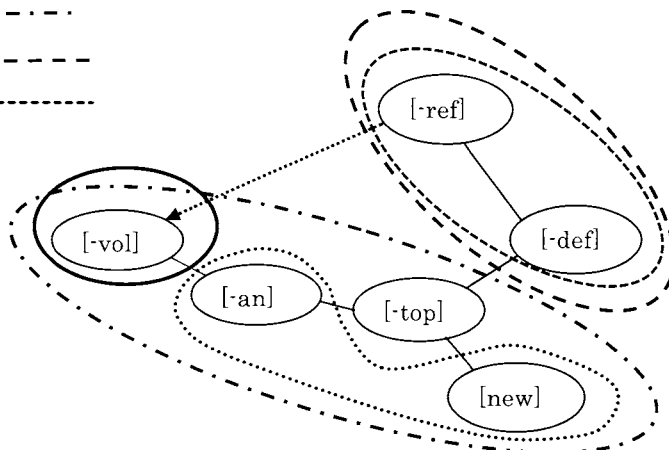


図2 アイスランド語の非人称領域の意味地図

アイスランド語のデータからは、語順の倒置は M&O の意味地図よりも広く、話題性に関わる領域 ([top], [new]) から動作主性に関わる領域 ([-voll]) まで広がるように思われる。その一方で、一致の消失は [new] (民話の冒頭) から [-an] に及ぶものの、その間の [-top] は含まれないように思われる。また、指示性に関わる領域 ([-ref], [-def]) と話題性に関わる領域 ([-top]) のリンクは明らかでない。M&O では非人称受動文がこれをつなぐものとして考えられているようであるが、M&O の非人称受動文の扱い方が必ずしも明瞭ではないため、アイスランド語の非人称受動文のマッピングについては疑問が残る。

5. おわりに

本稿では、Malchukov & Ogawa (2011) による主語の特徴に着目した非人称構文の機能的分類に沿ってアイスランド語の非人称構文の主要なものを検討した。主語の機能的特徴と、それぞれに対応するコード化方略を検討することで、指示性のない 3 人称男性複数代名詞の用法や、話題性のない主語の倒置、一致の消失など、一般に単独では非人称構文として取り上げられていないものも非人称の領域の中に入れて考えられることが示された。意味地図の検討においては、アイスランド語のコード化方略も概ね M&O の意味地図に沿った分布を示しているものの、語順の倒置や一致の消失に関しては M&O の意味地図とは合わない部分があることを述べた。今後さらにアイスランド語のデータを精密に検討し記述の精度を上げるとともに、提案されている意味地図の再検討を行うことが必要である。

<注>

* 本研究は JSPS 科研費 26580072 の助成を受けたものである。

- 1 アイスランド語はインド・ヨーロッパ語族ゲルマン語派の言語である。アイスランド共和国の公用語で、母語話者数は約 30 万人。基本語順は SVO である。名詞類には形態論的な格として主格・対格・与格・属格の区別がある。名詞には接尾辞定冠詞のついた形と、つかない形がある。不定冠詞はない。動詞の単純時制として現在と過去の区別がある。動詞の一致がある場合、動詞は文中の主格名詞句と人称および数の点で一致する。
- 2 一般にアイスランド語の受動文は「vera (be 動詞相当) + 過去分詞」で形成され、非人称受動文もこの要素をもつ。なお M&O では、主語が不定／総称的である場合に用いられる動作主のない受動文のみ取り上げられており、これについては 2.6 節で触れる。
- 3 目的語の有生性の度合いによって目的語の格標示に違いを生じることがある。たとえば、þvo「洗う」という動詞では、人間などの生物の目的語は与格で現れ(身体を洗う場合など)、無生物の目的語(洗濯物など)は対格で現れる。

<略号>

2	2人称 (2nd person)	N	中性 (neuter)
3	3人称 (3rd person)	PL	複数 (plural)
DAT	与格 (dative)	PRS	現在 (present)
DEF	定 (definite)	PRSPT	現在分詞 (present participle)
F	女性 (feminine)	PST	過去 (past)
GEN	属格 (genitive)	PSTPT	過去分詞 (past participle)
INF	不定詞 (infinitive)	SBJV	接続法 (subjunctive)
M	男性 (masculine)	SG	単数 (singular)
NOM	主格 (nominative)		

<参考文献>

- Einarsson, Stefán (1945) *Icelandic: grammar. texts. glossary*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press.
- 入江浩司 (2015) 「現代アイスランド語の天候表現」『金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇』7: 37-48.
- Keenan, Edward L. (1976) Towards a universal definition of subject. In: Charles N. Li (ed.) (1976) *Subject and Topic*. New York: Academic Press, 303-333.
- Kress, Bruno (1982) *Isländische Grammatik*. München: Max Hueber Verlag.
- Malchukov, Andrej and Akio Ogawa (2011) Towards a typology of impersonal constructions: A semantic map approach. In: Andrej Malchukov and Anna Siewierska (eds.) (2011) *Impersonal constructions: A cross-linguistic perspective*. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins, 19-56.
- Sigurðsson, Halldór Ármann (2004) Icelandic non-nominative subjects: Facts and implications. In: Peri Bhaskararao and K.V. Subbarao (eds.) (2004) *Non-nominative subjects*, vol. 2. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins, 137-159.
- Sigurðsson, Halldór Ármann and Verner Egerland (2009) Impersonal null-subjects in Icelandic and elsewhere. *Studia Linguistica* 63 (1): 158-185.
- Thráinsson, Höskuldur (2007) *The syntax of Icelandic*. Cambridge: Cambridge University Press.